

— 目 次 —

■昭和49年度予算3月定例県議会に
おける知事説明要旨 8

■主要施策の内容17

- ・第1 社会福祉の充実と健康の増進18
- ・第2 快適で安全な環境の造成22
- ・第3 生涯教育の推進と芸術文化の振興40
- ・第4 豊かな社会への基盤づくり42
- ・第5 産業の高度化と働く環境の改善45

■<この人と30分>
芸を地で行く.....笠 智衆54

■グラビアページ

・<ふるさとの心>.....市房の鴨..... 3

- ・天守堂と代官屋敷.....27
- ・勝海舟と鎮道寺.....28
- ・わが町・わが村.....水上村.....29
- ・カラー熊本.....30
- ・美しい熊本づくり運動.....32
- ・天草の災害復旧をみる.....34
- ・体力づくり県民大会の記録.....57
- ・銀座で甘夏無料配布.....58

随 想 欄..... 6

蔵原惟和・園田道子・本田真一

表紙は、肥後象がん・刀のつば 熊本の代表的な工芸品の一つ。



▲ダムに憩う鴨の群れ



▲市房神社参道入口の杉木立ち

市房はさきに「青少年旅行村」に指定され、野営場等の整備が完成したので、この夏に開村される。

鴨の旅立ち

大寒が過ぎるころから鴨のころはしきりに騒ぐ。日々の食餌がふえ、体重が増し、翼の筋肉に力みなぎり、何故とはなしに遠く飛び立たねばならぬ思いに駆られ始める。そして、ひとたび湧いた鴨の「帰心」は誰もおさえることはできない。

市房の頂上に残る雪はふかく、山おろしの風はときとしてこのダムの湖上を吹き渡ることもあろうが、それでも、少しづつ水がぬるみ、日照が伸び、空が明るくなってきたことを鴨の群れは知っている。

ここに住むマガモ・カルガモ・オシドリたちは、春日の遅々とした運びにあわせて、ひたすら、ひとつの時の訪れを待つ。そして、三月の末、旅立つゆうべが訪れた。

早春の日没のかけが湖面に長く尾をひくとき、ひっそりと待っていた鴨の群れはいつせいに羽搏く。

この日の羽搏きは常の日と異なることを鴨たちは知っている。いままでは日暮れにここを立ち、球磨川の流れをたどりながら球磨盆地に飛来し、厳しい霜の結ぶ畑地に餌をもとめてきた。しかし、今日は遠い大陸をめざして真直ぐ飛び立たねばならぬのだ。

三十羽・五十羽・百羽。激しく水面に叩きつける集団の羽搏きの音は、他の集団の決意を促すかのような。

湖を飛びたった鴨の群れは湯山の里の周遊をいく度か重ねながら少しづつ上昇する。高く、低く、乱れつつ、整いつつ、やがて彼らはまっすぐに北を指し影のように立ちふさがる九州山脈の尾根を這う。

高塚山、上福根山、京丈山そして雁俣山……星明りにそびえたつ連山の尾根に沿い、溪谷の広さにしたがってときには列を拡げ、ときには身を寄せあう。

夜の闇にいつ、何が彼らを襲うかも知れぬ危険な飛翔ではあるけれども、彼らは夜の山脈を恐れてはならない。大陸では、あるいは更に高い山脈を越えねばならぬのだ。

私たちの殆んどが鴨の旅立を見ることができず、その経路も今のところ辿ることはできぬけれども、眠れぬ夜のひととき、眼を閉じれば、月明のなかに熊本の山脈を越え、あるいは有明海を北上する鴨たちの鋭しい眼差しを思い浮かべることができよう。

ダムの対岸の桜がいつせいに花を開き、市房に青若葉が輝くころ、渡りを終わった鴨の群れは、大陸の湿地帯の一隅で荒涼と吹きすさぶ風に身をさらし、静かに羽を休めているであろう。

市房、湯山の里は、いま春の盛りを迎える。